

優秀賞

命の瞬きを輝きに変えるために

白百合学園高等学校 1年

金子 瑞花

雨上がりの湿気を含んだ、清々しいとは言い難い匂いを嗅ぐと、私の目の前には忘れられない記憶が蘇る。私が世界に出会った日のことだ。ニョクナムという魚醤の香りと、雑多なベトナムの匂いは、私が世界との繋がりの中で生きていくことを、強く後押ししてくれたのだ。

私には、国際協力をしたいという、大きな夢があった。しかし、世界との繋がりを、学生生活の中から考えるには、私の想像力は乏しすぎた。そこで私は、ベトナムの孤児院でのボランティアに挑んだのだった。

「挑んだ」という表現が、その時の私にはぴったりだった。慎重な私は、ベトナムという国を理解するための、ありったけの情報を集め、市民に広がる経済格差の背景を自分なりに咀嚼し、挑んだボランティアだったが、本当に必要なものは、そんな薄っぺらな上辺だけの理解でないことがすぐに分かった。子ども達は、真っ直ぐに愛を求めてきた。特に乳幼児は、私の腕に体を委ねると、その手を決して離さなかった。世界中から、たくさんのボランティアが訪れる孤児院での出会いは別れを意味することを感覚的に知っているからなのだろう。ぎゅっと握るその手の力強さは、愛を求める強さそのものだと感じた。ミルクの甘い香りが漂う汗ばんだ赤ちゃんの体を、母のように抱き締めると、一気に私の中で母性が芽生えた。母親が、どんなことをしてでも、我が子を守りたいと思うように、私もこの子が生きることを、肯定的に受け止められるような働きかけを、何が何でも続けていきたいと思った。「共に生きる」ということは、あなたという存在、あなたらしさ、そしてあなたの命は、私にとってもかけがえのないものだということ、伝え続けることなのだと思う。

私は、握れば握り返すその小さな手を、決して離したくなかった。数日間の関わりの中で、私の意識は大きく変化した。日本を出発する時には、何かを施そうと意気込んでいた自分の愚かさに気が付いたからだ。子ども達の、自分らしく生きたいとの伸びやかさから、私は自分のあるがままを受け入れ、生き生きと生きることの尊さを教えられた。環境や条件に左右されることのない人間的な純真さに、私は言葉にならない感動を覚えていたのだ。

最終日、私は「さようなら」を言わないまま、子ども達の小さな頭を包むように撫でて帰ってきた。子ども達の別れの数を増やしたくなかったからだ。

様々な困難の中で、「弱者」と呼ばれる人々は日本にも、そして世界にも存在する。世界情勢が複雑化する様相の渦中で、生を危ぶまれ、生きる人々もいる。私がそうであったように、「助けたい」、「役に立ちたい」との一念で行動することが、多くの人々にとって、「共に生きる」ことの体現に

繋がっていくということは間違いではない。しかし、「弱者」と呼ばれる人々は、人間的弱さを抱えているのではなく、どんな時にも自分らしく生きようとする、崇高さを持っているのだ。一人一人のその人にしかない命の瞬きを、お互いを大切に思うことで、大きな輝きに変え、共に生きることが喜びになるのだと確信している。

私は再び、ベトナムに行きたいと心に誓った。そして、今も心はしっかり子ども達と繋がっているつもりだ。私は子ども達に不足していると聞いた文房具を届けるための声掛けを始めた。ある人にとっては、孫にプレゼントを贈るような気持ちなのかもしれない。またある人にとっては、学ぶことで新しい世界と出会って欲しいとの願いを届ける行いになるだろう。大切な人を想うように、社会と、そして世界と繋がっていくことこそが、「共に生きる」ことなのだ。

世界中に、私の大切な人を増やしながら、私らしい人との関わりを、これからも続けていきたい。